水芭蕉（へびのまくら）

徳安達昌

ウエブで文章を見た。「高校に通っていた頃、南小倉駅を利用しましたが、『蛇の枕』という骨董品店がありました。まだ、あるでしょうか、住所は小倉北区の木町一一」。水芭蕉をヘビノマクラとする通称がある。座禅草も水芭蕉もバイケイソウも、ヘビノマクラと呼ばれる。植物図鑑には「良い所では生育しない」、という植物愛好家の言葉があった。

山沿いの沼で白い花弁とツクシ頭を見たことがある。花びらの部分は葉が変形したもので佛様の後ろの光明に似ている。真ん中の棒状のものに花が密集して、花が終わると葉が大きくなり、一メートル近くになるものがある。この長くて大きな円形の葉が芭蕉に似て、湿地に生えることから、ミズバショウの名がついたとある。

小宮昭男さんは川沿いを歩いて帰るところだった。小倉の中心を流れる「紫川」は、魚やカニを間近に見ることができて川の流れに親しむ。『風の橋』の風車がまわっていた。金属の羽根が太陽光を反射して住人の不評を買ったが今は塗料が反射を抑えている。都心を走る高速道路から車両の響きが伝わって来た。久しぶりに見る朝の景色……白い建物が川に沿う緑に溶け込んで美しい。

城内（小倉城の区域）に、一般図書を豊富に蔵する北九州市の中央図書館があり、南側に女性の権利擁護をうたう『ムーブ』、と、『文書館』の建物が見える。『ムーブ』の裏口から文書館まで人の出入りが少ない。針金で囲った駐車場から黒いスーツの女が這い出してきた。双方、歩みを止めなかったのでぶつかりそうになった。

「済みません、よそ見をしてしまって」声が出ていなかった。

女はすべるような早足で反対側に移った。黒い喪服の顔にベール、絞った体つきとたくみな足捌きは年の功がわからない。左右、前後を振り返らず、引き締めた唇を隠すように去ろうとする。肩のラインにうろこが光った。

こういうタイプを颯爽とか格好よいとかいうのであろうが、女姓の服装や振舞いがわからない七十歳の昭男さんには怪しいものが美しいものに見えた。先には自動車道路と広い河畔がある。女は大手町病院の玄関前を小走りになり、右側の荘厳な寺の門を大きく離れ

て高速道路の下の道路へ入りこんだ。朝、車両が少ない自動車道を横切って川土手へ向かうつもりらしい。なぜか、女の後ばかり追う……すぐ後を歩く自分に気がついてまた驚いた。奇妙な疑念が生じた。川土手に出てみよう思った。そこで対岸を見ていた。移転した病院跡が迫っている。

手のひらの下方に浴衣が見えた。白地に紺の絵柄は入院時に慣れ親しんだ昭男さんの服装だった。草履は……ゴム草履が足の下に入り込んだ。南小倉の公園までは記憶があった。老妻の三回忌を済ませて公園のベンチにいると、逝った芳子さんがやって来た。一緒に空に浮かぶとすぐいなくなった。生まれ変わりの審判を受けるので忙しいと言っていたが、またとり残された。

年寄りは生きていなければならないが生きがいを感じる機会はあまりない。生きているのが修行、他人に喜びを与えて社会に尽くすことが大切と前に教えられた。さて、誰が言ったものか思い出せない。

何と新鮮で安らかな世界、光と風が体の中を抜けて行く。ベッドで横になっているより心地がよい。水草が這い上がる石垣のあるコンクリート橋を歩きだすと、川面に白い鳥が動かずにいた。サギであろう、目のすぐ後ろにも灰色の斑(まだら)がある。いつも見かける鳥とは違うようだ。

強い風が吹いて来ると、川面を見下ろす女のベールがはためいた。真っ黒い眼と広がった口、唇の周囲には溝のようなしわも見える。眉も、額に消えかかって隠しようがない。

「バックシャンか……」つぶやく。

「じい、バックシャンて、何?」

毛糸の帽子をかぶった、五、六歳くらいの女の子が昭男さんの両袖をつかんでいた。

――夜が明けようとする頃、男たちが入って来た。簡易造りの佛壇には灯明があがり、若い男が頭をたれていた。田舎から戻った長男が遺体に付き添っていた。男たちは頭をさげると、白い布をたぐり寄せて納棺の準備を始めた。

「おやじ、こんなに軽くなって」、若い男がかすれ声をあげて壁際に離れる。

遺体を木製の棺に納めて滑車のついたストレッチャーに積み込むと、男たちは手を添えて出て行く。昭男さんは祭壇の裏にこどもがいるのに気がついていた。

看護士が入って来て片付けをはじめた。昭男さんは天井から下降してグループの後を追った。廊下から裏口へ生温かい空気が抜けて行く。後ろから人が来て、重なって通り過ぎ

た。別の風が追いかけて来ると後ろでドアが閉まる。病院を出たら誰もいなかった。
昨夜、救急車で運び込まれて、自分はこの医療センターで死んだのか。今は、家に帰る途中の、いろいろ道草を食っているところであろうか。

白いニットのカーディガンと毛糸の帽子は、松原のおばあちゃんが孫に買ってくれたもので、小さな良恵のお気に入りだった。跳ね回るその姿を、昭男さんは八ミリビデオで何回も撮った。子どもはそれを着ていた。
次女は子を連れて家に戻ってきた。不本意に結婚させたデキちゃった結婚で相手は定職がない遊び好きの男だった。ひとの車で事故を起こし、次女がお産で入院中も別の女を家に引き入れていた。三度目の事故の時、次女の腹には生み月が迫った赤ん坊がいたが、とても生んで育てる対象にはならなかった。次女は離婚を決意して中絶した。
老妻が立ち会って、赤ん坊がもう、人のかたちをしていたと泣いて知らせてきた。
「赤児の冥福を祈って供養を重ねることが大切、霊界に去った子のために合掌して下さい」水子の寺で拝んでもらった。
十年近くも前のことで思い出すことがなかった。爺は覚えていない。次女に似たようなその女の子の顔かたちは記憶にない。昭男さんの心がつくり出したものを見ている。
「名前は何という……のだ」死んだ赤ん坊に名前などあろうはずがない。
頭の中に現れ出る思考を絵に描くようにして伝えた。
(なぜ、わしをじいと言う)
(じいに会えたから) 同じ家系が死んだら相手がわかるのだと応える。
(母はだれか) 次女の顔が浮かんだ……。次女の良恵さんは現世に生きている。
(じいの……その人) 記憶と心が絡まるように対話を始めた。
石垣のところに赤い着物を着た別の女の子といたという――去年の夏祭りか、孫娘と三人で祇園太鼓を見に出かけた。宵に小倉城前の夜店をのぞいて、その後、紫川のへりを歩いたのだ。祖父が横たわる病院の霊安室にひとり前の晩から入りこんで、夜が明けるまでそこにいた。それが証(あかし)か……、同じ家系であることの証(あかし)か。
(ここでは何でも、思えばそうなるよ、じい)
さっき見知った記憶と情報が重なりはじめた。(草履はどこかと思ったら……あったな)
この子はあの生まれそこないの赤ん坊なのか……思うほどに心根と表情が似て来た。
泣きそうにゆがんだ目をして近寄って来た。

（長く待ったのか）ひしと抱いた。
（わしのことがどうしてわかった？）（お姉ちゃんが教えてくれた）
こどもの視線が土手の方を向いている。女の姿はもう土手の上になかった。

石垣を駆け下りると、葦の根元で動く影が見えなくなった。
（おねえちゃんいた？）上から、子どもが訊いてきた。
（見えなくなったのだ）あんな高いところから……落ちたのか。
（あれはヘビだよ。寝るとこにもどったんだ）降りて来てまた袖をつかんだ。
木町の小川の底を何か長い黒いものが走るのを前に見たことがある。こんなに敏捷な生き物が近くに棲んでいると驚いたものだ。カラスヘビはシマヘビの黒化したもので、耕地や河川敷に住む。ネズミやカエルを捕らえるが大きな餌は飲み込めない。地表を動き、危険を感じると尾を振るわせて威嚇する。
（おーい、落ちたのか）草がゆれるところに問うてみた。
（落ちたんじゃないよ）風にのった応答が返ってきた気がした。
駐車場から這い出して来たのはヘビだと子どもに教えられた。地上で散乱する光を無視する感覚にまだ慣れない。この世界には、光とは別の次元に霊の粒子が存在して、密度のある物質を様々な濃淡に見せている。
（お姉ちゃんのネグラはどこだって）
（この先を抜けたところ）子どもが応えた。
セブンイレブンや自動車部品の店が並ぶはずれに、流れ水が地下に真下に落ちるところがある。とても深くて広いのだそうだ。小倉の街にそんなところがあっただろうか、昔、小倉に造兵廠と言う大きな工場があった。大手町病院の横に記念碑もあるが、昭男さんはここの生まれでないからよくわからない。死んだ義父がよくその話をしていた。
古い爆弾のかけらが見つかった記事などが新聞にもまだ出る。
旧日本陸海軍で、兵器・弾薬・車両などの購入・設計・修理などを担当した機関を造兵廠(ぞうへいしょう)と言った。広大な敷地を誇り、小型戦車、小銃、機関銃、高射機関砲、砲弾、さらに、風船爆弾や化学兵器なども製造した。小倉造兵廠は後に、関東大震災で被害を受けた東京砲兵工廠の集約移転先となり、全国八つの造兵廠の中で生産額二位、人員数三位、総員四万人の大規模な工場であったといわれる。
文書館の駐車場から這い出た女はありきたりのバックシャンではなかったのだ。

子どもがいない、(おーい、こども……どこだ) 水面に水草の切れ目が見えた。
小魚の群れが深いところへ散ったが、濁った川底から一匹がゆらゆら近づいて来る。
メダカが口を開け閉めしている。(ここだよ、じい) 子どもの声がした。

昔、小倉の紫川には褐色の大蛇が棲んでいた。大蛇は篠崎大神の使いとして長い間、村人に崇められていた。ある時大蛇は、川の沿線にある木町という森で美しい女蛇に出会い、恋をして毎日通い続けた。ところが、ある日を境に、女の姿が突然見えなくなった。女蛇は、貴船神の使いで遠方の地へ出掛けていたのだが、知らない大蛇は帰らぬ女蛇恋しさに、石を枕に泣き続けたという——篠崎神社の拝殿の横に大きな石があるが、その「蛇の枕」の話は今も小倉に伝わる。

風にあおられたベールの下に忘れられない面影があった。

福岡東方にある昭男さんの生まれ故郷、汚れに染まることを知らなかった少年の頃、昭男さんは美しい女に恋をした。女は彼の裏切りがもとで急に去ってしまった。めぐり合ったとしても決して実らない恋ではあったろう。女は神楽を舞う巫女で父親の宮司が死んだ後、生活のために母親と祭礼の旅に出た。玄界灘の島、壱岐に渡り、漁師の網元に嫁いで子どもをひとり生んだがその年の冬、はやり病(やまい)にかかって島の病院で死んだという。

壱岐は島全域が壱岐市と呼ばれ、律令制下に制定された壱岐の国「魏志倭人伝」にも記される。孤島には「海のはらほげ地蔵」や「森の地蔵」など百体近くの地蔵菩薩が祀られて庶民が現世利益を求める素朴な信仰の地であった。危篤に陥った我が子のために女は、命を絶ったが——何か、自然を超えて神に訴える隠れた力が女にはあったのであろう、壱岐の祭神や地蔵たちがこぞって母親を助けようとした。我が命と引き換えに子を助けてほしいと女が祈ると子から死神が抜け出して女の命が尽きた。

神々は憐れんで、女の姿を地面を這うヘビに変え、神事に携わる神子の仕事も与えた。それは、死んで孤独の世界に迷い出る霊魂たちを、黒ヘビが見つけて追いすがり、先導して冥土へ案内する役であった。女が息を引き取る間際には、小倉の貴船神から派遣されていた黒いメス蛇が海際から呼ばれて這い上がり体を貸したという。

「ビロード」のつやがある妖艶なカラスヘビは、シマヘビと同様、性格はきついが毒蛇ではない。瞳も黒くやさしい。その後、小倉と壱岐の祭神が連絡を取り合ってヘビに言われた。

「お前が壱岐に来ている間に、紫川の男蛇は待ちきれず竜となって天へ消えた。もう帰ってはこないだろう。『蛇の枕』の大石も小倉の篠崎宮へ移動させたので跡はもぬけの殻となった。当面、護り手がないので壱岐とともにお前の管轄とする」と。

壱岐と小倉は海の下の水路でつながっており、ヘビは地面を這い回り、どこまでも移動して両域で責務を努めようとしていたが、小倉にも棲み場所があることを知って『蛇の枕』の跡地までやって来た。ミズバショウの水路は小倉を越えて、遠く大分との国境、豊前にまで繁茂する。ミズバショウの連なるところがヘビの出仕先となった。

霊魂たちはミズバショウの中の平たい底部に入り込むと座禅を組んで眠り始める。黒ヘビはそのひとりひとりを訪ねて、冥土への道筋を説く。死んだひとの魂は神子が見せる過去や未来の世界に思いをはせながら、自分の置かれた運命や課題を悟るという。壱岐では、島で生まれた娘が成長して夢相を鑑る嫗（みおうな）となり母親を導いた祭神に仕えた。神子の女は黒ヘビ六代に移り棲んで五十年、宿主は小倉の紫川に棲むカラスヘビの子孫で、隠された支流を昇ったところの《蛇の枕》の跡地に棲むという。

赤ん坊のはれぼったい眼と損なわれた体が水の中にある。霊魂たちの思考が昭男さんの心に入って来た。立ち木や草むらにも濃淡があり彼にもはっきり霊が見える。かたちがあるもの消えかかったもの、霊魂が浮遊する世界は絶え間がなく騒がしい……呑み込まれそうになる。

（メダカには、よくはいるのか）

（ハヤやフナは動きが早くて大変なんだよ、じい）水から抜けて横に立った。

先刻のメダカが腹を見せて浮きあがる。意識を取り戻したように、たじろいで泳ぎ去った。子どもを抱くと川草の匂いがした。

（メダカに入るとこ、もう一度、見ていいか）

（いいよ）念を入れている……離れた一匹がたじろいだ。

この子どもには自分のよく見知った顔でいてもらおう。その方が気持ちが安まる。

（メダカと呼んでいいかな）

（うん）他の魚にも入って見せようかと言う……得意技らしい。

（いや、お姉ちゃんのいるところへ行ってみたいのだ）手をつないだ。

（大通りは大変だよ、びっくりがふえる）昭男さんは人が背中から通り過ぎる感じを思い出した。（人通りを避けて裏道からは行けないのか）造兵廠へ通じた軌道跡があるはずだ。

（ネコがいるんだ）近寄りたくないところらしい。
（ネコに、わしらは見えるのか）訊くとうなづいた。
爺も一緒に行くからと、その近道を抜けることにした。自動車用品の店舗裏に、女がよく姿を見せる場所があるという。
昔、造兵廠に通じた軌道跡のレンガ道に子どもの手を引いて入り込んだ。
（何が怖いかな……ネコ、やっつけるもの）子どもが訊いてきた。
ネコの怖がるものか……。ネコが食べると死につながる食べ物の記事は見たことがある。ハンバークのたまねぎ、シチューのたまねぎ、たまねぎは煮ても焼いても毒が消えない。イカも消化が悪い、長期に食べさせてはならない。あわびの肝はネコの耳に炎症や皮膚炎を起こす。鳥の骨もネコの内臓を傷つける――総じて、人間の食べ物をそのまま長く与えるとネコは腎臓病になるということだった。
（ネコはドンッと足踏みすると逃げる。ユカはここを通って塾へ行くぞ）そうか……、孫娘はこのメダカの姉になるのか。
（ユカ姉ちゃんってすごいんだ）子どもが見上げる。
朝の緑道にひと影はない。わしはまた孫と手をつないで歩いている。表通りを歩いて人が体を抜けて行くよりはずっといいと思った。
踏み固められた土地に夜間点灯するランプが並んでいた。病院とマンションが隣り合わせに建って車の群れが道路際に押しやられている。くだり坂の下方の平地に、数え切れないほど沢山のネコがたむろしていた。好奇心いっぱいで、顔に絵の具を散らしたような大きな野良ネコが近寄って来た。
タヌキのような幅広い尾が動いて見えた。メダカが昭男さんから離れなくなった。
以前は、ネコを追い払うのは実に簡単だった。棒切れやダンボールなどの長い切れ端をふりあげて大きな声を出せばよかった。
しかし今はかたちのない姿でどう立ち向かうのか。
（わしたちが通ってもかまわないか）ネコに訊いた。
（ナニ？）ネコが歩みを止める。
食い物をくれるわけではなかろうと上目遣いにこっちを見た。いやな匂いの粒子がネコの前歯から漂って来る。野鳥を食ったあとの死肉の臭いだ。猫は背の高さの5倍ジャンプする。飛びかかってくるか通り抜けるものか見当がつかない。眼に人影が映って見える。背中が丸くなり目がまん丸になっている…とびかかるポーズだ。

（じいの背中に乗れ！）先の空き地を睨んだ。
（あそこに着いたと思うぞ、えいっ）空に駆け上がってつんのめるように着地した。
（やったぞ、スーパーマンだ！）思わず言葉が出た。
（なに、それ）メダカが訊く。
（じいが子どもの頃はやった、空飛ぶ人間のことだよ）
（すごいな、じい）尊敬の目で見上げたが背中からは降りなかった。
自動車用品の店と英国のミニカー会社との間に黄色の五階の建物があった。三階以上が人の住む部屋で、二階の壁に、『骨董サロン軽食喫茶』、屋上に、『蛇の枕』という消えかかった看板が見えた。一階のウインドーガラスに、『〇〇不動産管理　賃貸住宅の入居斡旋、古美術品の売買します』と文字がある。階段を昇り切ったところにもうひとつのシャッターが降りていた。ＪＲの南小倉駅で乗り降りする人たちが利用したであろう接客構造が見えた。『蛇の枕』という店の名も印象に残ったことだろう。
事務所の入り口に鍵がかかっている。
（お姉ちゃんはどこだろうか）前にかがむと引き戸の隙間から体が入ってしまった。黙って侵入するのは犯罪だが生身の人間と霊とは違う――見えないし、かたちも流動的だから捕えようがなかろう。つまらぬことを考えながら有田焼の絵皿をかき分けて内部に入ると、緑色の釣鐘と脇差（刀）がにらむように並んでいた。薄暗い階段の下では電気のメーターが音もなくゆっくり回転している。暗がりの壁には長い三段の棚、コンクリートの床の上に木製の机と長椅子があった。土間には水溜りもある。硬いものが外から壁を壊したように、半分以上、土砂に埋まりかけている。
壁の破れ目から外が見えた。淡い光の中を洞窟の奥が左に曲がっている。
（じぃ）メダカが袖を引く。垂れた髪とその間から見ている二つの眼があった。
闇の中にはとぐろをまいたような影も見えた。

白足袋の足をぶらぶらさせて天野里美がいた。五十年前、そんな風に見える若い娘に昭男さんは恋をしたのだ。雷山の地蔵堂で母親と休んでいた娘、壱岐の海辺で神楽を踊る夢の中の少女。その素顔やかすれた男っぽい声が好きだった。
（来たんだね、わかっていたよ）女はしわがれ声を出した。心が伝わって来る。
五十年前の姿を今、見るのはまぶしい。とても謝(あやま)りきれない不誠実なことをしたのにそのことに触れず、わかっていると女は応じた。

（あれからだいぶ経った……釣り合いが取れないから少しふけようか）顔をいじった。
（これでどうだい、十歳若くした）
それから起こっためまぐるしい変化に昭男さんはくらくらとなった。
ヘビに乗っかった里美の姿が、赤銀簪（かんざし）をつけた黒い垂髪の巫女装束から、金色の神楽鈴をもつゆがんだ灰色の前天冠姿へ二重、三重に浮かびあがる。複数の容貌が変化を物語っている。若い女子学生の里美は仏様のような安らぎのある容貌となり、ヘビと精進を重ねて成熟した気高い姿に見事に進化していた。ひとの生い立ちや境遇にかかわり先の世界へ導くという神子の生き方が伝わって来る。
同じ世界にあったなら、昭男さんもこのような究極の姿に生まれ変われるものだろうか。
（子どもはあなたの系統か、川にひとりでいたんだよ）
（孫だ。生まれる前に死んだのだ）（因果な子だねぇ）
（どうして、来るとわかったのだ）（だから……、壱岐を切り上げてきたんだよ）、
里美はあまりしゃべらなかった。
古美術喫茶の裏にある崩れた洞窟から入り込んで、大手町病院の土台の下を横に移動して、大きな寺の真下に来ている。小倉造兵廠の地下部分は埋められて長い間変化しなかったが、寺の移転やマンションの建設工事があって内部が崩れた。《蛇の枕》の大岩が消えた跡にも硬いものが落ちて来た。造兵廠は下請けを使用せず、機械設備には優秀な欧米の工作機械を具備した。終戦直後に米軍の第二十四師団司令部が置かれたが、進駐軍が去り、造兵廠跡地の接収が解除されると米軍司令部は壊された。公表された図面や見取図はほとんどなく、総司令部が解体された後でも地下部分は調査されずに残ったといわれる。
（神様から借りた体だ、時々は眠らせなければ）里美の巫女が立ちあがる。
蛇の上、数センチのところに巫女姿が浮いている。これから旅立つ場所に向かうのだ。水に浸された洞窟の中を鬼火が泳ぐように舞う。青い炎がひとつ、またひとつと、ミズバショウに吸い込まれる。やがて、白い布切れのような仏焔包がぼんやりと色づきはじめ、内が赤、外が青の二層になった小型光体が飛び出してくる。
（どうだい、決心はついたかい）ミズバショウのひとつに長い首の影が見えた。
ミズバショウは葉間から純白の仏炎苞を開く。仏炎苞は葉の変形で、中央にある円柱状のものが花が集まる花序(かじょ)である。
メダカが入って来た。純白の部屋が水底から引っ張られたように少しだけゆらいだ。
二層の光が乱舞する場所に出た。ネズミ穴が闇の中で天井高い洞窟に姿を変えていた。

先の平たい岩には巫女の許しがないと上がれない。蒼然たるミズバショウの世界に社(やしろ)があった。透き通ったかたちは奇妙な岩盤としか判別できないが、ここから霊たちが出発する。身寄りを亡くして取り残された霊魂たちが次々に飛翔を求めてここにやってくる。『無縁死』という呼称は、つながりを失い孤独死を選ばざるを得ない人たちが多いことを明らかにした。霊魂たちは漂うことに疲れてミズバショウの中で仮眠をはじめると、中央の柱がゆっくり回りだす。ひだのある柱は彼らの人生の記憶や苦しかった思い出などを巻き取りながら根元にある漏斗から種子に注ぎ入れる。霊たちが目覚めると、種子から光のように放射される映像でまたそれを見る。

(自分の置かれたところがわかるのだよ) ヘビが涙を流すこともある。

運命を悟った霊魂はミズバショウから遊離して天に向かって飛翔する。過去を懐かしみ未来に期待して――ただ待っているだけではここにいつまでも居れないことを悟るのだ。

水から抜けるヘビの体躯が光った。水が深いのは大岩の周囲だけで流れは水路に散らばって奥に消える。流れに逆らうようにミズバショウが匂う。洞窟の壁がゆるやかに曲がって、同じかたちがいつまでもつづくのは不思議だ。奥の方に途方もなく、ぼんやりと見通せない空間――水草が糸のように立ちあがって色や形のちがう植物が絡まり合い、景色を別のものにしている。草が編み上げたすだれ模様、自然のカーテンだ。

巫女が舞飾りをつけた透き通った姿で現れた。社(やしろ)を背景に広大な色のない世界が輝き出した。眼の届かない高いところへ光体が昇って行く。

(仕事場さ、わたしが送り出すのだよ)

自分の祈りはここにあると白い花が舞台に立つ。ミズバショウの群れが取り囲み、ツクシ頭が揺れ動く、妖しくも幻想的。清純な花と言うよりは、寄せる波にあやされる妖しい肢体が舞いはじめた。銅板葺きの祠(ほこら)のまわりを白い花と青い炎がゆれ動く。

白装束に、長すぎるような眉とそろった歯並び、

赤の伊達襟を、半襦袢と白衣の間に着けて、

緋袴、無地の千早に、花簪を頭に飾り神楽鈴を持つ。千早の生地は薄い。

鈴を鳴らすことは御魂を奮い起こすと唱え、鈴の数は7、5、3で、

布は青（緑)、黄、赤、白、黒（紫）の5色布で舞う。

〝シャン、シャン、シャン、シャン、シャン……〟

幻想的な姿の魔女と、目に見えない祭器をあやつる音が聞こえる。岩の上でヘビがくねっているとしか人間には見えまい。

（あなたは自分のことしか考えない、利己的で無関心な男）女が鈴を打ち振った。
シャキーン、ズシンーと景色が震えた。
（どう、思い出したかい）天野里美が笑っていた。

花の中で横に腕を伸ばすと芯の周りに体ごと巻きつく。メダカも入り込んだ。
（こんなところにいて、行かないのかい）カラスヘビが丸い頭で白壁を押し広げた。
（これからの道筋を案内してあげる）ヘビが消えると里美の気配も上に行った。
蛇と神子の両方にミズバショウの匂いが入り込んで同化が進んでいる。
（わしは佐賀寄りの田舎で高校まですごした）昭男さんはメダカを引き寄せた。
（これは小倉に住み始めた頃だ。今はガレキの対応で大変な北橋市長だが、前や前々の市長もよく覚えている。ひとそれぞれに北九州という街の特徴があった。末吉（市長）さんの時代は、北九州の景気経済の賦活期と言われて、いろんな形の橋が紫川にかかった。いくつもある橋だけで街の物語ができた。資金を得て東部の曽根空港も整備され、北九州ルネッサンスと言われたものだ）わかった振りのメダカがうなづく。
（それまでは、ただ、製鉄所と炭鉱で栄えた大きな汚れた街だった）古い話をはじめた。
（じいは関西からの転勤者だ。ほら、このフェリーに乗って小倉に着いたのだ）
小倉の東港に入る船が、スクリーンに出た。
（夜明けにこの関門橋の下をくぐった時、わしはこの地に骨を埋めることになると思った。わしは一匹狼で、それまでは自分勝手な人間だった。この土地では苦労もしたが支援してくれる人もおおぜいできた。小倉祇園や盆踊り、商店街や地区の行事によく参加した。子供会の子たちを連れて東や西の遊園地に出かけた。会社勤めの営業しか知らなかった男がいろいろ体験した）、（関門トンネルや若戸大橋のほかに覚えたところが多い。門司港レトロやグリーンパーク。新生した西の熱帯園には家族で何度もカンガルーを見に出かけた。これは街の真ん中のチャチャタウン。ほれ、大きな観覧車が廻って……）べらべら口が動いた。（市民憲章や環境モデル都市、非核都市平和宣言とかもいろいろ敬服した。おっ、このバナナの叩き売りは門司で覚えた）と、歌のはしりを口ずさむんでいた。
メダカが口をあけて見ている。
（子供が三人になった頃、商売がうまく行かなくなった。会社勤めに戻ったがわしと芳子さんはそれから本当の苦労を味わった。わしはひとと和合せず、『我、行かん』が多かったのでな、多くは自業自得、自分が造りだしたものだった……。芳子さんが死んだ後は何も

する気がしなくなった。ほら、これがあの新日鉄。新日本製鐵という大きな会社が北九州の八幡にはあったのだ――）メダカにはもうわかるまい。

（メダカはこの頃、お母さんのお腹にいた。わしの二番目の娘、良恵さんの腹の中だ）

途端にスクリーンが揺らいでわからぬものが画面を横切る。

メダカがアッと口をあけたが、昭男さんは気がつかずに話し続けた。

これが爺の思い出だ。これからは一緒に先の世界に行こうと子供を抱きしめた。

（その子は行けない。その子には生まれ変わりに必要な課題というものがないのだ）

巫女の声が魔女の響きを伴って降りてきた。

（なぜだ、ここに残せばこの子はまた浮遊霊になってしまう）

昭男さんが天井に向かって言うと、スクリーン一面に毛むくじゃらなものがひろがった。

（しきたりなんだよ。昭男さん、何かが邪魔をしている。涅槃の知恵が届く前に入りこんだ。命は絶つことができるが、ひとが生まれ変わるには生きるための課題がなくてはならぬ。あなたが六歳の頃、邪念がついて、それを振り払えないまま孫がこの世に出ようとして生まれ損なったのだ。生まれても因縁に妨げられ、迷妄に満ちた生死を繰り返す。先の世界には行けないのだよ）

とぎれを修復しないとそれは起きると言いながら巫女が現れた。柱をなでおろし、ぶら下がったものを手にしている。

（ごらん、青いものがここで終わった。これが芽をふくことはない）

（邪悪の念はどうしたら外れるのだ……外れれば生まれ変わりができるのか）

方法はないのか、何か考えてはくれまいかとメダカを見ながら巫女に頼んだ。

（わたしにもわからない。よくわからないが……）

里美は職責からはみ出た仕事を頼まれた役人のように黙ってしまった。柱のくぼみに種子を差している……白い画面が点いたり消えたりするがそれっきりだ。

――やがて時が過ぎ、巫女は腕組みを解いた手を、頭の上でぐるぐる回しながら、

（同じ家系の二人が戻ればまた遭遇するやもしれぬ。このメモリーは感度が悪いようだ。機械をとり替えればどうにかなるかも）、電気店の売り子の合点した素振りをする。男っぽいその態度は、若い頃の昭男さんに里美が手を貸す気になった時の癖だ。

ミズバショウの柱が頂上に届いて静止した。天野里美が言った。

（終点だよ。昭男さん。さあ、乗換えで行こう）

ミズバショウに似た褐色の草は、ダルマソウ（達磨草）と呼ばれる。そのスクリーンに出る映像はミズバショウの何倍も繊細で、スローモーションやコマ落とし、逆走もできる。昼夜の経過もわかるから、事象の起因を調べるのに欠かせないと巫女が教えた。

土がひどく臭う達磨草の土地にこれから行かねばならない。色違いの種子を二個、柱の根元からとり外して巫女が差し出す。

（心を強くすればやれる）

昭男さんは、しだいに透き通りはじめた自分の手でそれをつかみ取り、暗い海原を一気に飛び越えて達磨草の森に着いた。そこに、巫女の念がまた届いた。

（ダルマソウは感度のよい帆かけ船だ。心を強くすれば動く）

森の空間に向けて船着場に乗り物が並ぶ。群生して膨らんだ褐色の草がうごめくように空を向いていた。（過去を精査して事象を探す。子供の時の記憶を一枚一枚めくりながら、事象が発生した時点を見つける。それが起因するものかどうかの見極めが大切。前世を安易に変えてはならない。対処するかどうかは昭男さん、あなたが決めるのだ）

マシーンを離れることも考えなければならないが、水気がある間にここに戻って来るようにと巫女は繰り返す。前世の記憶をもつ子供が言葉を話し出す二、三歳児の３割にも達する。輪廻転生をあると考えた方が自然現象との整合性を考えると無理がない。前世が種子に詰まっているというなら見てみたい。世代のちがう同じ家系の二人が行けば反芻して遭遇するかもしれない。

保存された映像のスキャニングがはじまった。昭男さんが六歳の頃、家人がよく出入りした五十年前の小坪（家に囲まれた庭）が正面に出て来るように視点を設定、特異な動く映像が出ればすぐ静止するか鼓動が来るようにした。

一九四八年の初日から映像が流れはじめる。達磨草の柱が時々登るのをやめて静止シーンを見せる。ビデオテープの早回しとそっくりだ。スクリーンの中が変って秋の山景色となり、十月になった。十月二十五日の午後二時を過ぎた頃から毛むくじゃらの手が動くのをとらえた。確かに達磨草の映像はハイビジョンのようにはっきり出る。庭の筵(むしろ)の表面にマンジュシャゲのような花がパッパッと染み出ている。

（なんだろう……これは）

『運行』の溝にレバーを入れて待った。巫女の声が響いた。

（船は閻魔大王の通行手形を兼ねるから、誘いを受けても黄泉へは行かぬぞ）

（わしが生まれたところへ行って見よう）

福岡西方にある糸島半島へ、事象が発生した時刻に到着するように目標を設定した。

操縦席に腰を下ろした。風防を二十度開いて始動ボタンを押した。波打つ振動を発しながら達磨草が横回転をはじめた。浮き上がりながら前進する。接点が切れた凧のように身震いしながら暗闇に向かって移動する。放たれた風船のように浮き上がりながら横回転してスピードをあげた。神社が現れてすぐ消えた。二層光体が左右に分かれて通り過ぎる。達磨草マシーンは、触角のような細長い根を垂らして洞窟の中を走り抜けた。

造兵廠跡の地下道に戻って『蛇の枕』の店の裏側から、あっという間に大空に駆けのぼった。小倉の街から生暖かい初夏の空へ吹き上げられるように舞いながら、福岡の西方を目指して軌道に沿った飛び方をはじめた。

（馴染みの男に人肌脱いだから神様に罰されるかも……）

巫女の里美が心根をもらしたのを思い出していた。

（じい、これが、飛行機！）お祭りに行く子どものようにメダカが喜ぶ。

（まあな。今頃はトンボに乗っても行ける）

（トンボってなぁに？）

（大きな目と羽根がある。田舎にたくさんいる）

（じいの父さんや母さんに会えるかな）祖父もまだ生きている筈だ。

（ちょっと、手をはなしてくれんか）

マンジュシャゲが見えて来た。この時期、山にいっぱいになる。

海際を飛ぶと、海岸線から糸島半島の奥へは近づきにくい。預けたレバーを子どもがなかなか放そうとしない。洞窟では気がつかなかった昼夜の区分が目に留まらぬ速さで交互に来る。外界が明るい灰色にまたたき雲が渦巻く。過去へ逆戻りすると外界を変動に見せる。工業地帯を過ぎて福岡の上空を通ると、山々に絡まる送電線が途切れて都市が逆相的に縮み出した。白い建物群がなくなって山に溶け込んだ。

背振り山系が現われた。佐賀と福岡との県境に位置する脊振山は標高一〇五五メートル、山頂に航空自衛隊やアメリカ軍のレーダーサイトがある。過去に二度、航空機が遭難した空の難所である。昔は山岳宗教の修行僧がいたが今は山頂まで車で観光客が行く。

西の端から川が光るのを見ながらもう下降しはじめた。トーンダウンした夜と昼が途切れずに来る。（じい、川で魚つりしたことある）子どもが訊いて来た。

（あるぞ、紫川だ。ハゼ釣りでバケツをいっぱいにした）

それは、急に現われる。巫女の言葉を思い出した。

眼下に糸島半島がひろがる。「糸島富士」と呼ばれる可也山が見えた。下方に雷山の山波が迫り、黒牛がしりもちをついたような山脈には杉やヒノキが多い。曼殊沙華の赤い色も山肌に見える。マンジュシャゲとは秋に咲くヒガンバナ、見る者が悪業を離れる天界の花。有毒な球根植物で花弁が放射状につく――仏様に供えるのにふさわしい。

中腹に寺が見えた……正運寺だ。葺（ふ）いたばかりの反り屋根と曲がった小道、山道に沿って降りて行くと人家の密集した村が現れた。達磨草は山を背景に集落の上を旋回した。村の両端に橋のかかった小川と光るため池が見える。子供の頃、大堤（つつみ）と呼んだその沼に、村人が大勢で入り込んで手に余るような網で鯉をすくった。干し稲を柵から降ろして脱穀する村人たち……生まれ育った『伊都』の村が、六十年前の姿で広がっていた。

神社の横にゆがんだ藁葺（わらぶ）き屋根がある。母屋の北側には見慣れた柿の木もある。『御所柿（ごしょ）』という球形の実が毎年たわわになった。神社の背中側から、切り立つ杉林の外側を廻って小坪の方に降りようとしたが、マシーンに力が残って、降りにくい。柿の大枝を抜け出たつもりが下枝に引っかかった。達磨草は膨らんだ枯葉のように垂れ下がった。

文字盤が一九四八年十月を指して回転している。操縦レバーから手を離さずに周囲を見た。藁葺きの家は、昔、家引きをした時にゆがんだ。裏庭に、ビワやみかんの木がある。妖怪の肌のようなコンニャク芋が畑地から突き出ている。幼い頃、コンニャクを摺る母のすり鉢を、小さな手で一生懸命抑えたことを思い出した。

筵の上に薄茶色の穀類が盛り上がってまた平たくなる。この時期、農家では籾（もみ）を干す。稲作の種籾（たねもみ）を苗代に蒔くため春まで大事にとっておく。病気や虫にやられていない種子を選んで稲刈りすると、種子を痛めないようコンバインの回転を落とし、乾燥機を使わずに天日で乾す。

マシーンの回転が止まった。窓からの景色が動かなくなった――目標に着いたのだ。

突如、サルの赤い顔が窓いっぱいに広がる。野性の日本猿が一匹、マシーンの背後から現れた。赤い尻の腹部が真横に来て、灰色の深毛がドンッとマシーンに当たった。達磨草がずり落ちる……が二股の枝の間にはまり込んで止まった。

猿の姿は、もう見えない。

（出てみる。もし、じいが戻らない時はこれを押すのだ）飛び立つ手順をメダカに教えた。

これから何が起ころうとも、メダカを巫女が待つところに帰したい。こどもはうまく操

作して見せた。(よし、メダカは、もう、飛行機乗りになれるな)

風防を一枚、外して覗くと、大猿が離れたところを降りていた。気配をかくした身のこなしで母屋とつながる杉屋根へ近寄っている。下方に敷かれた筵(むしろ)のひとつに野良着の二本足が見えた。左手が顔を覆い、マキを持った右手が腹の上をそろそろと動く。いびきが聞こえた。古い額入りの写真でしか見たことがない白ひげの祖父が、日向で仰向けになって惰眠をむさぼっている。遠く杉屋根の物置小屋に、薄茶色の獣が一匹もたれているように見えた。息をしていない。メスザルか……灰色の猿が微動だにせずうつむいていた。

当時、山には猿がいた。人間の子どもたちが沢蟹(さわがに)を捕りに行く頃、猿をよく見かけた。食べものがなくなると人里へ降りて来るが、人家の柿はいつまでも残っていない。柿を目当てに里に降りてきた猿が干し籾(もみ)を口に入れて、人間の怒りを買ってしまったのであろうか。人間がその猿をマキで打ったのだろうか……籾(もみ)の畝(うね)に乱れてまた直した跡がある。

伴侶を見つけた大猿は杉屋根から飛び降りて近づいた。うつぶせのメス猿の顔の下に自分の鼻先を入れてゆり起こそうとするがメス猿の反応がない。オス猿は何度か試みたが、困り果てた。脇に転がる竹カゴを飛ばして暴れはじめた。

眠りこける年寄りと苛立ったオス猿――達磨草マシーンから出ようとする昭男さんの前に予想もしない展開が起きた。

野良着の二本足が寝返りした途端に、大猿が老いた昭男さんの祖父に跳びかかった。右手のまきが外れて飛んだ。大猿は祖父の体に覆いかぶさり馬乗りになる。猿のわめく声とゆがんだ形相が達磨草マシーンの中から見えた。猿の歯は長くて鋭い。起き上がろうとする老人の手を白い牙が思い切り噛んだ。

驚愕した年寄りが悲鳴を上げると、猿はところかまわず噛みついた。攻撃がすざまじくて逃げられない。野良着が筵から這い出して地面を転がるが猿は離れない、容赦しない。胴体のあちこちを噛んだあげく、老人の顎の下に顔を入れ、首筋を銜(くわ)えてふんばっている。しわだらけの首が泣き声を発して、動きがとまった。猿は何か引きずり出そうとしている。

母屋から、悲鳴をあげて男がひとり飛び出てきた。地面のマキを拾ってふりかぶり、二本足に覆いかぶさるものを追い払おうとした。血ぬれて汚れたそのケモノは横に飛んで柿の木に這いあがった。

幼い頃の昭男さんが畏敬の目で見ていた若い父親だった。日に焼けた背高な男は、倒れて動かない体に駆け寄った。年寄りの体にはもう震えがきていた。染み出した血が曼殊沙華に似た赤い模様を筵(むしろ)の上に作り出している。老いた父親を抱き起こし、その重篤な状態を知った男は唖然となったが、思い直したように母屋の方を大声で呼んだ。

小柄な女が走り出て来た。昭男さんの母親だ。若く、とても懐かしい。女は年寄りの体に覆いかぶさるようにしてあちこち調べる。首の後ろを持ち上げ、肩と一緒にタオルでしばり、だきかかえて呼びかけた。

「わかる？　じいちゃん！　じいちゃん」もう、返事がなかった。

「権藤さんに電話してくる」父親が消えた。

権藤さんというのは村の開業医で内科も外科も診てくれる。

数分して、男が大人をふたり連れて戻ってきた。

「とりあえず、じいさんを中に入れまっしょ」、

大人たちは戸板を担架にして血だらけの体を抱えあげると母屋へ消えた。

男が裏庭にまた現われる。猿の姿が木の上にあることを知るとすぐ家の中に消えた、右手に黒光りするものを持って出て来て、それを構えて狙って、撃った。山鳩を撃つ散弾銃だった……動いていた猿の背中から、毛が剥ぎ切れて散った。獣のからだは、くるくるまわりながら地面に落ちて来た。地響きがした。柿の小枝もバラバラ落ちて来てあたりに散った。

頭から首から血を飛ばしながら、猿はすぐ起き上がって吼(ほ)えた。が、至近距離からもう一発、銃声がするともう動かなくなった。　背高な男は、口を一文字に結んで、猿の体をずるずると物置のところまで引きずって行く。灰色のメス猿の死骸がある物置の壁に打ちつけるようにして姿を消した。

時間が流れた。メダカと息を殺したように達磨草の中にいた。表の方は騒がしいが裏庭には誰も来ない。達磨草はぶら下がったまま強い陽射しを浴びていた。

(あれがトンボ?)メダカが指さす方角から大型トンボが枝をかいくぐって、やって来た。

(オニヤンマだ。地上すれすれに飛ぶ)

枝にとまってつやつや輝く大きな目玉を動かしている。盆トンボと呼ばれるウスバキトンボも、遠くにいるようだがよく見えない。小型のトンボはあかね空いっぱいに飛んできて、ぶつかりあうようなところで、静止したり移動したりする。

（メダカ、マシーンは動くか）水気がなくなる前に戻って来るよう巫女が念を押していた。
達磨草が回転を始めた。（大丈夫、なんともない）メダカが応えた。

駐在（巡査）が大人たちを連れて裏庭に来た。猿の死骸を見ながら話を聞いてメモを取る。この家の長老が死に至ったことを受け止めて巡査が何度もうなずく。それを顔見知りの村人たちが囲んでいた。その後一時間近く裏側に変化がない。だんだん暗くなる景色を見ながら昭男さんはメダカと動けなかった。これからの見当もつかない。

夕暮れの風がひたひたと迫る頃、動く影を裏庭に認めた。小さな影法師が物置のサルの死骸へ近寄っている。月の光を背にして人間のこどもが猿の死骸にかがみこんでいた。小枝を拾い上げると、うらみの目を向けて大猿の死骸を突いている。自分をかわいがってくれていた祖父をこいつが噛んで死なせた……憎くてたまらない。怒りで高ぶった感情が伝わって来た時、子どもの小脇から何かがずるずると落ちた。こどもの手がそれを抑えた。

右手の小枝が外れて猿の顔の上ではねた。…と、死骸が物憂げに頭をもたげようとする。まだ死んでいなかった。流れ出た血が肩や首のまわりで固まって、猿は身動きひとつできなかったが、何か触った気がした。まぶたをうすく開けて眼を凝らすと、人間のこどもが立っていた。子どもは薄毛のやわらかいものを左手に抱えていた。生まれて間もない猿ので…オレの子だ。伴侶は生まれたばかりの子と一緒で、老いぼれのマキから逃げられなかったのか……息が切れそうになって顔を近づける。男の子は小猿を両手に持ちかえて、グイッと前につき出したが、すぐ引っ込める。垂れ下がるものをぶらぶら見せる。

大猿は息が途切れそうになった。目が真っ赤に潤んだ。鼻の両側に縦じわをそそり立てて吼えた。男の子はギョッとあとすざりする。猿の怒りの念は槍の穂先のように闇を飛んで、達磨草の中の昭男さんにも届いた。夜の闇に光る猿の眼は身震いするほど恐ろしい。

「子を返さなければお前を呪ってやる……お前の家系を呪い殺して、生まれ出ようとするものをことごとく根絶やしに――」猿は動かなくなった。「爺をよくも、よくも」、

男の子は枝を拾いあげてまた猿を突いた。猿の思いは理解されず、呪いを男の子につないで息絶えた。母親が呼びに来た。

「昭男、いつまで、そんなもんを持ってるんだ。おじいちゃんが大変なんだから、はよ、家にはいんなさい」呪いは、六歳の昭男さんとつながってしまった。

マシーンを逆回転させると、巡査が村人に聞き取りをするところにまで一気に戻った。

男の子が小猿を見せるまでまだ間がある。外に出ようと考えた。
大猿が息もたえだえに、仔猿をよこせと言い始めた。「子を返さなければお前を呪ってやる。家系を呪い殺してやる。生まれ出ようとするものをことごとく根絶やしに――」。サア、急がねば、小猿を返さねばと外へ出ると、渦巻いた風が襲って来て昭男さんの体が消えはじめた。霧のようにからだが溶ける。あきらめてマシーンにもどった。
この世界にもうひとり、自分がいるので消されてしまうのか……困った、困った……とても、困った。頭をかかえていると、メダカがまだ当惑した顔で見ている。
そうだ、まだ生まれていないメダカならどうなるだろうか……。
（メダカ、わしはここで存在できない。爺の代わりに外へ出て、小猿を返すように男の子に頼んでみてはくれまいか。小猿を返せば、わしらも呪いから解放される）――爺とはじめて会った時のあのぼんやり輝く女の子の姿になって、と言い添えた。猿が息たえだえに、「子を返さなければお前を呪ってやる。家系を呪い殺してやる。生まれ出ようとするものを、ことごとく根絶やしに――」言い始めた。さぁ、メダカ、頼むぞ。
白い女の子が暗がりに浮かんだ。手のひらを上に、何かぶつぶつ言いながら降りている……メダカだ。呼びに来た母親が金縛りにあったように立ちすくんだ。白い女の子は猿の死骸の前まで降りると向きを変えて、男の子に、
（返して！）と両手をつき出した。男の子は母親の後ろから出て来ると、素直に小猿を差し出した。小猿の死骸は両手の間を素通りして親猿の腹の上に落ちる。猿の眼からしだいに赤い光が弱くなって消えた……猿にもわかったのだろう。

達磨草マシーンで現代の小倉（北九州）にもどった。西の空に夕陽がまだ浮いている。『蛇の枕』の看板がある古美術喫茶の前で降り、慣れた方法でまた扉の下から事務室の中に入りこんだ。巫女姿の里美がすり鉢を小突いていた。ご機嫌らしい……タイムトラベルの経過がもう伝わっている。
（ふたりともご苦労だった。そこで待て）手を休めずに暗がりから言った。メダカを抱きあげて、（やってみたいことがあるのだよ）昭男さんが好きだった天野里美に変身していた。鼻にかかった職業的な神子の声で、
（髑髏をなめて変身した神子がいた。わたしも姿を変えて生き残ったひとりだ。年季明けが延びるかも知れないが、あなたの孫のために精一杯やってみよう）、
魔女には、魔女の覚悟が要求される邪道があるという。（これも使う）、と、すり鉢の中

身を見せた。天台烏薬(うやく)という常緑の低木は、漢方では健胃・鎮痛薬として用いられる。秦の始皇帝が不老不死の仙薬を探し求め、その命を受けた徐福が日本に渡来して蓬莱山で発見したのがこの霊薬である。生まれ変わりを願う霊を封じ込めて薬草とともにすりつぶし、これを母親になる女が口に入れて子を孕めば、霊が正統に宿って生まれるという。

（腹を下したり呼吸困難を起こすから解毒剤を入れておかねばならぬ。種子が若すぎると毒も強い）低い声で言い切った。昭男さんは青い種子を鉢の前に置いた。

（メダカ、この中にはいるか）（生まれ変わってまた、じいに会える？）

（会えるとも、また会いに来てくれ）鉢に入れると、巫女が肘(ひじ)を見せて摺(す)りはじめる。

粉をふりかけると緑色の液がみるみる粘土質に変わった。粉を加えながら練ったものを、まるめて里美がヘビの顎に押し込んだ。（じい、はいった）メダカから応答があった。

カラスヘビと外に出る。昭男さんが行く先を誘導しなければならない。同じ家系の女たちは、昭男さんの通夜の葬儀に出るために、今夕、木町の家に寄り合って身づくろいする。メダカの母親になってくれるひとは、前世の記憶が伝わることもあるから近い血筋のひとがよいと巫女が示唆した。母親になってくれるひとが家に来ていることを願って出発した。

木町の緑道は、原町の緑道と同じように、昔、造兵廠に通じた引き込み線の跡にある。ヘビと一緒に沿道から土管に落ち込んで体をよじって中を進んだ。坂道にある石塀の排出口から外に出るのだが、出る時は宙ぶらりんで、路上では体を隠すものがないから無防備になる。

シメ縄飾りの玄関と記念碑がある家の前を通ると、頭上に奇妙な視線を感じた。と同時に、ネコの気配がマンションの建設現場付近から強くなった。尻尾の大きなあのタヌキ猫が配管から落ちるヘビを見つけてやって来た。汚れたひげが触るほど近くに来て爪を立てようとする。（こ奴っ！）、昭男さんが怒って念じると背中の毛が吹き飛んで姿を消した。

――しかし、一刻の後、執念深い汚れ猫は、夕闇の中を猛スピードで追いすがって来ると、あっという間にヘビを銜えた。胴体を口に入れて足の爪で押さえ込む。ヘビは灰色の腹を路面にさらして身をよじる。爪を外そうとするが外れない――絶対絶命の危機になった。

そう思った時、槍の穂先のようなものが木の茂みから落下してきた。尖った先が猫の背中を突いて、執拗に、頭も突いて跳び離れた。猫は驚いてとびはねた。銜(くわ)えなおそ

うと口から外れたヘビの胴体は横すべりしながら土手をのり越え、人家のある路地へ消えた。

槍の穂先もどこかに消えていた。降ってきたのはサギのようだった。紫川で今朝見かけた、灰色の斑(まだら)が目の後ろにある白い鳥に思わぬところで助けられた。

（大事なものは、ほれこの通り）ヘビが家の前で顎の下を見せる。

玄関から明かりがもれていた。義父母が手をかけていた盆栽がまた並び、屋号の提灯がしまい忘れてある。暗い軒下をもどる昭男さんに、提灯のある玄関は毎晩、わかりやすかった。部屋には女たちだけの気配。小宮家、吉村家の長男、長女夫妻が来たが、男たちだけ先に斎場に出かけたらしい。年下の子をみる孫娘の甲高い声がした。

鉢植えの根元から出てきたヘビと玄関から入る。巫女姿の里美もヘビから抜け出して横に並んだ。履物の間からヘビが頭をもたげているが誰も気がつかない。

巫女を先導して、まっすぐ、タタミの上を進んだ。坊さんがおれば霊の存在がわかってしまうがここにはいない。容器を下げる中学生の孫娘を横目で見ながら巫女が、

（ちと若すぎる……）という顔をした。昭男さんは首を横に振って座敷の中を進む。

（左がわしの長女だ。三十五を超えたがまだ子ができない）

由紀子さんは夫の着替えを包みながら、片付けを終えた吉村家の次女と話をしている。ふたりの女は練り菓子をテーブルに移して、服が汚れないようにもうひとつずつ食べようかと話している。湯飲みを手にした目的のない指が動く。

（このひとかい）巫女が訊く。昭男さんはうなずいた。

その時、女たちの背後にアカネコがいて、ひとの動く気配に気がついたようだが、巫女も人の姿に見えるのかおとなしい。ヘビを見れば跳びかかる…ヘビは板の間に上がった。

（ネコがいたのかい？）巫女が驚いたように訊いた。

逝った芳子さんが、車にひかれた野良猫を動物病院に運んで治療してもらった。三本足になったネコを「ジロー」と名をつけて家にあげて飼っていた。

ヒョコヒョコ近づいて来た。よそ者を見る目つきで巫女をしげしげと見ている。

巫女は、千早（巫女装束の上に羽織る）の花模様を抜き出して畳に落とした。手を離れて光の中に現れたそれは、本物のミズバショウになった。乾いた草は風をためて、畳の上をコトコト回って動き出した。「だれ、こんなもの、持ってきたのは？」

吉村家の次女が声をあげた。アカネコが戯れはじめる。

（ほら寄ってきた。向うへお行き）巫女が指先で風車を飛ばす。

しかし、それもほんの一刻の間だった。襖（ふすま）の陰から顔を出した黒ヘビにアカネコが猛然と飛びかかった。テーブルの端から湯飲みが飛んで転がった。……が、しかし、その瞬間、巫女の手が上にまっすぐ伸びて大きく宙を切った。すると、驚くようなことが起こった。目の前の光景が凍りついたように静止して部屋にいるものの動きが止まった。ネコは宙に浮いたまま、動いていた人間もその姿勢のまま、誰一人動かなくなった。

昭男さんは、里美の巫女が魔道を発揮したのだと合点した。由紀子さんを指し示して、

（メダカ、この女のひとに入るのだ）、

静止した女のひとりに、黒ヘビがしのびやかに近づいた。胸元に這い登り、湯飲みを持つ手に巻きつく。手首から垂れ下がって頭を高くもたげた。巫女がその顎の下から、緑色の丸い小粒を取りだして由紀子さんの半開きの口に押し出した。呪文を唱えながら、唇に塗りつけている。やがて、ぼんやりした輝きが女のひとの体の中をゆっくり降りて行く……由紀子さんのお腹のあたりに光の格子に包まれた子どもの姿が浮かびあがった。

（メダカ、お別れだな）。

部屋の様子が変わりネコも人間も一斉に動きだした。雰囲気が元に戻り、由紀子さんが口を拭いている。

「いやねえ、わたしよだれたらして……これ変な味？」唇をなめまわす。

同じものを食べた吉村家の次女があきれ顔で言った。

「あんた、できたんじゃないの」

巫女が由紀子さんの耳に祈念を入れこんだ。

（柿の実を日々供えよ。そうすれば邪魔されずに子が授かる）と。

（わたしゃまた島流しだ。昔の男の願いを聞いてやったから）

（すまんことをしたな、ありがとう）斎場から念仏が聞こえて来た……もう逃げられない。

（忙しかったね。奥さんには会うてないんやろ）巫女装束を脱ぎ捨てながら里美が言う。

サギはもう霊場に行ってしまったかもしれない。人間は死後、およそ五十年後に生まれ変わるという。芳子さんにはまた会うことができよう。昭男さんは今まで、自分のことばかり考えてきた。涅槃とは煩悩が慈悲となって働く智慧の完成、悟りが智慧だ。神子の年季明けは延びそうだ。生まれ変わる前に里美を手伝わねばと思った。

（ここで、わしにできることはないか）、

（これはどうだい、ほれ）、巫女が神官の衣装を出してきた。

天へ消えた大蛇の抜け殻か、身につけるとピッタリ、姿がりりしく変わった。生きておれば生命体の修行期間――修行とは人に喜びを与えて社会に尽くすこと。

今度は、魔女と棲んでみよう。褐色のシマヘビが紫川で水案内をしていた。

それからまた五十年、二十一世紀に地球人の男に生まれかわった。口元が広がる女と歩いている。「蛇の枕」という店が昔と同じ場所に改築中だ……覗いてみるか。

おわり